名寄市立大学の窓から～知への誘い～

vol.46

「子どもの発達を支える ～違いを認め合うために～」

保健福祉学部　社会福祉学科　准教授　矢口（やぐち）　明（あきら）

子どもの発達に関して、発達障害という言葉が、教育関係者だけでなく一般的にも使われるようになってきました。発達障害の代表的な診断名としては、自閉症やアスペルガー症候群、注意欠陥・多動性障害（ＡＤＨＤ）、学習障害（ＬＤ）などがあります。

発達障害の特徴の一つに、あることに眼が向くと、ほかのことに注意が向かなくなってしまう「シングルフォーカス」があげられます。目や耳などから入ってくるさまざまな情報を整理することが難しく、一つの刺激に集中してしまうことで、一つのことをしながら別のことをしたり、行動しながら別のことを考えたりすることが難しいほか、特定のことに強くこだわりをもつこともあります。

このことは、発達障害だけに当てはまることでしょうか。

自動車免許を取って初めて道路に出たときのことを思い出してみてください。安全に運転することに集中して、景色を見る余裕などなく、体中が緊張してとても疲れたと思います。多くの人は、経験を重ねていくことで次第に慣れ、初心者マークが取れる頃には、通り過ぎる景色を楽しんだり、同乗者と会話をしたりすることが、当たり前にできるようになります。

ところが、経験を通して慣れていくことができない子どもがいます。いつも初心者マークを付けたぎりぎりの状況で生活しているのです。過去に経験したことを次の機会に生かすことができず、失敗した経験やうまくいかなかった記憶が積み重なり、自信がなくなっていきます。

うまくできないのには理由があるのに、できることが当たり前の状況で、周囲の理解がなく、困って、つらい状況になっていることが想像できます。このことは、発達障害の診断の有無に限らず、さまざまな場面で誰にでも起こり得ることです。

雨上がりの空にかかる虹は、外側の赤から内側の紫に向かってだいだい色、黄色と変化していきますが、はっきりとした線はありません。発達障害かどうかという判断も、虹の色と同じようにはっきりとした線を引くことができないと言われています。

子どもの発達を支えることを考えたとき、「子どもが困っていないか」「つらい思いをしていないか」「どうしてうまくできないのか」「どうすればうまくできるのか」という視点で子どもを見ることが必要になります。この視点は、学校教育だけでなく、家庭でも、まちの中でも、必要になる場面があり、その具体的な方法は、これまで特別支援教育が培ってきました。

大人が、このような視点をもって子どもに接していくことで、子どもの心に失敗しても大丈夫なんだという余裕が生まれ、子ども同士が互いの違いを認め合う雰囲気が作られていくことにつながっていきます。子どもの発達を支え、豊かな心を育てていくのは、大人の役割の一つだと意識しながら、子どもたちを見守っていきたいと思います。

新図書館完成へのカウントダウン！

平成29年４月にオープンする新図書館は建物だけでなく、図書の貸し出しや蔵書検索を行うシステムなども新しくなります。

大学の夏休み期間にあたる８月から９月には、所蔵している図書へのＩＣタグ（情報が記録されたシール状のもの）貼付作業を集中的に行いました。

今後、貼り付けたタグと図書１冊１冊の情報を結びつける「エンコード」作業を行い、新図書館システムへの移行準備を整えます。

ＩＣタグの導入により、学生は新図書館システムの自動貸出機を使って複数冊を同時に貸出登録でき、とても便利になります。

▲新図書館工事のようす（外壁が現れました）

●問い合わせ

名寄市立大学図書館

☎01654②4199（本館：内線3114／分館：内線2200）